

小田実全集（小説 第2巻）

わが人生の時

講談社

小田実全集

Makoto Oda

サンプル版

目次

序章	
第一章	一九五一年十二月 その1
第二章	一九五一年十二月 その2
第三章	一九五二年一月・二月
第四章	一九五二年三月
第五章	一九五二年四月
第六章	一九五二年五月
後記	589

わが人生の時

Welcome, O life! I go to encounter for the  
millionth time the reality of experience and to  
forge in the smithy of my soul the uncreated  
conscience of my race.

James Joyce: *A portrait of the Artist as a  
Young Man.*

## 序章

この物語は、一九五一年末から翌年五月に至るまでの約半歳にわたる幾人かの青年の記録である。青年たちは、すべて現存した人物ではない。また、ここに展開される幾つかの事件も、すべて架空の事件にすぎない。が、おそらく、その半歳の間に、我々は、自分の周囲に、こうした幾人かの青年を容易に見出し得たであろう。それらの青年が、如何いかに苦しみ、如何に迷い、如何に愛し、如何に生きたかを、我々は一度ならず目撃したことであろう。が、青年たちは、そのまま、我々の視界を永久に去ってしまった、そして、今では、おそらく青年自身ですら、当時の自分をもはや自分とは考えないであろう――

この物語は、その青年たちの残した足跡を忠実に辿たどろうとしたものである。

一九五一年（昭和二十六年）と言えば、それは「講和」の年であった。まず、一月二十五日、アメリカ大統領特使ジョン・フォスター・ダレスが講和交渉の使命を帯びて来日し、羽田空港で「我々の目的は、日本にまもなく主権の完全な行使を回復させ、また、世界の自由国民と友好を持つ新しい時

代を日本に再び開かせる道を見出すにある」と述べた。この二十世紀の精力的な使者は、その後、当面のマッカーサー元帥、吉田首相との会談のほかに、全面講和・再軍備反対を主張する総評幹部、社会党鈴木委員長をも含めた各界の代表者とやつきばやに会見したのち「日本政府はアメリカの駐兵を歓迎している」との声明を残して、僅か二週間で日本を去った。吉田首相は、この声明に呼応して「朝鮮で共産勢力が公然と仮借なき侵略に出ている現実には直面して、大使は、日本本土及びその周辺にアメリカ軍を駐在せしめて軍備のない日本を守るためアメリカとの間に安全保障に関する取り決めを締結するよう要請されたが、政府及び国民大多数はこれを心からよろこんで迎えるものである」と述べた。

講和の性格は明らかであった。三月一日、ダレス特使自身が「極東に反共の防壁を築くつもりである」と公然と声明した。それは、ある年鑑の記述に従えば、「事実問題として、講和による占領終了後、米軍がひきつづいて防衛軍として日本に駐屯し《日本の自衛力》が出来るまで日本防衛に当ることを意味するのが明らか」であり、また「この安全保障方式については、日本国内にも反対するものがないわけではなかった。しかし、保守政党、政府は、いずれもこの方式による講和受諾の意志表示を行い、国民の多数もまた、それを支持するかに見えた」のである。

事はほとんどアメリカの筋書通りに運んだ。ダレス特使は八方に飛び、この「自由諸国」との講和の完成を急いだ。共産諸国の不参加は明らかであった。そして、アメリカ自身もまた、それを欲しているかに見えた。

しかし、意外にも、ソ連・ポーランド・チェコスロバキアの三国は、終始友好的な雰囲気の中に議事が進められているというサンフランシスコ講和会議の席上に代表を送った。けれども大勢はすで

に決していた。吉田首相の有名な「トイレットペーパー演説」を最後に会議は四日間で終り、九月九日、日本時間午前二時、この「史上稀まれな、寛大にして、公正な」講和条約は前記三国を除く四十九か国によつて調印され、また同日、ダレス構想の文字通りの第一歩である「日本国は……日本国に対する武力攻撃を阻止するため日本国及びその付近にアメリカが軍隊を維持することを希望する」と銘うった日米安全保障条約も、同じサンフランシスコの「下士官集会所」において調印されたのである。その日、講和の成立を祝つて日本の各地では提灯ちようちんぎょうれつ行列その他の祝賀行事が計画され、ある世論調査によれば、被調査人員の約四十一パーセントが「明るい気持ちになつた」と述べた。

しかし、講和が真に「国民大多数」の意志であるかどうかは疑問であつた。両条約反対の運動は組織労働者・学生を中心として大きく拡がり、一月から開始された全面講和賛成の署名は七月末で三六二万を越え、全面講和・再軍備軍事基地反対を主張する平和団体の数は刻々と増えつつあつた。だが、それにもかかわらず、両条約は、衆議院を十月二十六日、参議院を十月二十八日に通過したのであつた。そして、この問題に関して、社会党は、両条約反対を主張する左派と講和条約賛成・安保条約反対の立場をとる右派とに大きく分裂したのである。

こうした情勢をよそに、その年はまた特需景気の夢さめやらぬ戦後初めての、いや、表面的には戦前以上に華かな年であつた。例えば、昭和二十六年の流行は別の年鑑の記述するところに従えば「アメリカン・スタイルに飽きが来てフレンチ・モードに人気が集まり、布地、シルエットとともに柔かい線となり」「ドレス、オーバーともキモノ・スリーブで、スカートはタイトが多く」「帽子はオフ・ザ・フェイス・スタイルが圧倒的で、アクセサリーは造花、ブローチ、腕環、イヤリング、ネックレス

などが好んで用いられ」「一方、和服も復活し、生地も懐古的な高級品が出来た」等々であった。それに応じて、日本デパートメントストア協会の調査では、昭和二十六年五月の全国加盟店総売上高は四億五〇〇〇万円を突破し、昨年度の同月に比し、実に六割七分の増加を示したのである。

街にはアメリカン・スタイルの瀟洒しょうしゃなビルディングが続々と建築され、六年前のあの恐ろしい戦争の傷痕は急速に消え去って行った。おそらく我々の心からもそれは消失して行ったのだろうか、平和と繁栄がようやく我々を訪れて来たかのようにであった。すくなくともその言葉は、例えば、その年の九月講和と軌を一にして続々と各地に開局したクイズ・浪曲・落語が全番組の三分の一以上を占めるといふ民間放送を指すとき、そして、吉田内閣支持率がなお五十八パーセントを示す国民の「多数」を指すとき、当っていた。けれども、こうした特需景気は急速に崩れ去って行った。消費水準は次第に低下し、三月、アメリカに端を発する世界恐慌は急速に日本に伝播でんぱした。恐慌はまず流通部門を襲い、次いで繊維などの軽工業に波及した。十一月末には、織物業者、商社、問屋の倒産するもの約二六〇社に上り、不渡手形は東京だけで七月の九五二枚七二〇〇万円から十二月には一六六九枚二億三〇〇〇万円にまで達した。

一方、次第にサンフランシスコ体制は確立されて行った。世はまさに「逆コース」であった。追放解除によって過去の亡霊たちは大量に蘇よみがえり、その風潮に乗って、十一月の京大事件に端なくも露呈される天皇の再神格化が、注意深く試みられて行った。「国民道徳実践要領」問題、社会科の骨抜き——そうした一連の事実は、労働法の「改正」、自治警の国警編入中央集権化、予備隊の強化に呼応し、九月大橋法務総裁が明らかにした、後に「破壊活動防止法」として実を結ぶに至る特別治安立



法につながるものであった。

暗雲は去らなかつた。それは、だが、国内だけの問題でなく、眼を海外に向けても同じだった。朝鮮戦争はまだ続いていた。血なまぐさい風が我々の隣国に凄まじく吹き始めてから、すでに二度目の冬であった。

春はまだ遠かつた。無論、時として思いがけない瞬間に暗雲は切れ、薄陽が春の到来を暗示した。それは、例えば、三十八度線以北進撃・満洲爆撃を呼号するマッカーサー元帥の解任であり、また、六月マリク提案によつて開戦一年を経てようやく開かれた休戦会談であつた。けれども結局のところ暗雲は去らなかつた。休戦会談はこの年末になつても二、三の問題を纏めあげただけで、全く暗礁に乗りあげてしまつていた。

嵐は朝鮮にとどまらなかつた。この年、民族解放の嵐は、インドシナに、イランに、またエジプトに騒然と吹き捲つた。世界は文字通り動きつつあつた。それがどの方向に進むのであれ、世界は大きく変りつつあるかのようであつた。すでに、十月、スターリン首相は原爆を保有するものはアメリカのみでないことを明らかにしていた。それを、ある外交専門家は、米ソの勢力が均衡したゆえに戦争の危機は幸いにも遠のいたと樂觀した。だが、他の同じ専門家は、逆に戦争の危機が近づいた一つの徴候である、ときわめて悲しむべき断定を下した。後者によれば、来るべき新しい年——一九五二年（昭和二十七年）こそが、まさに「危機の年」であつた。

## 第一章 一九五一年十二月 その1

陸橋の下を列車はゆつくりと発<sup>た</sup>つて行った。由利滋は、陸橋の上から、父を乗せたその準急列車が次第に速度を加えながら眼下を一輛一輛通過して行くのを見ていた。列車は短かかった。意外なほど早く明るく窓を輝かした客車の列が終り、荷物車らしい暗い車輦が二輛ばかり続いたかと思うとそれもまたたく間に過ぎ去つて、後には赤い後尾燈ばかりが、列車の進行につれてするするとどこまでも伸びて行く二本のレールをほのかに彩りながら薄暮を遠ざかつて行つた。そして、やがてカーブにさしかかったのであるう、一点となつて暗黒の中に野火のように燃えていたそれは、駅の東はずれのちやうど関西線・城東線の二線が分岐し、その上を高架線の阪和線が交叉<sup>こうさ</sup>しているあたりで、急速に右へ弧を描いて不意に掻<sup>か</sup>き消すように見えなくなつた。

その後、この大阪市の裏玄関ともいうべき天王寺駅の構内は、一瞬、静かであつた。全てが――陸橋のすぐ下の今六時五分前を指している大きな電気時計の針までが、一瞬、凍りついたように動かなく見えた。そして、今まで近くの騒音にまぎれて聞えなかつた背後の阿倍野橋一帯の盛り場からの種々雑多な物音が、一様に鈍く、まるで潮騒<sup>しほざわ</sup>のように響いて来るのだつた。

だが、すぐ静寂は破れた。轟音<sup>ごうおん</sup>をたてて阪和線の電車がすぐ先のガードを渡つたかと思うと、大阪

駅からのラッシュ・アワの客を満載した城東線の五輛連結の電車が足下に滑り込んで来る——その後からは、列車入れ換え用の時代おくれの小さな機関車が甲高い汽笛の音をあげて、今度は関西線を慌だしくこちらに引き返して来るのだった。

由利はさつきからそうした妙にもさびしい孤独な感じのする風景を、放心したように見ていた。それは毎夜きまつてこの時刻に展開されるであろうなんの変哲もない、ありふれた、そして彼自身これまで何度となくちようど同じ時刻にここを通り合わせて何気なく眼にしたことがあるに違いない、裏玄関の名に恥じない侘びしい夜景にすぎなかったが、それが今日はどうしたわけか、彼の心を捉えて離さないのだった。いわば、今まで意識の片隅にもおぼせたことのないこの夜景を組み立てている一つ一つの要素が、例えば灰白色に冷たく光る十数本のレールだとか、サーチライトの高い鉄塔、そのサーチライトの光芒を全身に浴びてゆつくりと遠くの線路を横切つて行く数人の線路工夫のシルエット——そんななんでもないものの全てが何か意味あるもののように思えて来る、そして、この今まで夢想さえしなかつた未知の風景の中に一人突然とり残されたような、気がついてみると世界は彼一人を置いてもはや達しがたい距離を慌だしく駆け去っている、そうした心細さと孤独感を、彼は理由もなく味わっていた。

不可思議な、自分にもそれと明瞭に捕捉しがたい不安——と言うより、ちようど今この夜景全面に薄く紗をかけたように立ちこめている夕靄とも煤煙ともつかないものが、さつきから自分の心にも執拗に覆いかぶさっているようであった。

体はぐつたりして力がなかつた。数日來の不眠に加えて、アルバイトの家庭教師を途中ですませて

大学から諏訪森の家に帰ると、夕方の準急行で名古屋に出張旅行に出る父から、書類を忘れたから駅まで届けてほしいと電話を受け、すぐそのまま休む暇もなくここまで駈つけて来たおかげで、もの言うのも大儀な位ひどく疲れていた。(この異様な心的状態も、おそらくは疲労のためなのだろうか?) プラットフォームで列車を待っているうちに、何かそうやって父と無言で対していることが耐えがたい重荷になつて来て、そのまま父をフォームに残してここへ上つて来てしまったのだ……

半時間近くも経つただろうか、何度目かに城東線の電車が一きわ明るくヘッドライトを輝かして入つて来たとき、由利はふと寒気を覚えてようやく我に返つた。あたりはもうすっかり暗くなつていた。さつきまでそれでもまだうすぼんやりと稜線が認められた生駒山の低い山脈も、頂の航空燈台だけを残して暗黒に姿を没し去っている——由利はその暗黒に追いたてられるように足早に歩きはじめた。

しかし陸橋を渡り終ろうとするところで、由利はさつきから自分の悩んでいるその漠然とした不安が今はつきりとした形をとつて身に迫つて来るのに気づいて、半ば衝動的に立ちどまつた。それが不安の正体だったのだろうか? おおげさ大袈裟に言えば、彼は、今自分が一つの運命の転機に立つたように感じた。人生にはおそらくそのような瞬間が幾つかあるのだろうか、いわば、今まで信じて来たものの全てが一瞬のうちに崩れ去つて行く、今まで堅い大地だと信じていたものがどうかした拍子に単なる砂の堆積たいせきにほかならないことが判り、しかもそれを意識した瞬間から、砂は足元からざらざらと音をたてて奈落へ崩れ落ちはじめ——そのような瞬間を、彼は不気味なほど明瞭に知覚した。あたかも、

二十三歳の由利の生が、さつき父と別れてこの陸橋に上つて来てからの短い時間の間に、明確な折目をつけて今までとは全く異つた方向を指して急速に滑りはじめたかのようにあつた。それは確かに一つの転機であつた。だが、どういふ転機なのか？ また、どのような新しい運命が前途に待ち受けているのか？ それは判らなかつた。ただ、それが決して明るいものであり得ないことを、彼はなぜか身を感じた。

（もうかれこれ父の列車も次の停車駅の王寺に達する頃であろう）腕時計を覗き込みながら、由利はそうした重苦しい気分を一掃しようとして、今頃ガラ空きの二等車の片隅に、いかにも場違いな感じで膝も崩さずに行儀よくかしまつてゐるに違ひない父の猫背を、軽蔑けいべつとも憐憫れんぴんともつかない感情で思い浮かべた。だが、その想像図は中途で荒々しく断ち切られた。（もしかしたら）と、彼は不意に思つた。（何かが、何か限りなく暗い恐ろしいことが、父の身の上のに起ろうとしてゐる！）「関西線列車転覆事故」などという幾つかの不吉な文字が、なんの脈絡もなく切れ切れに頭に浮かんだ。そして、その恐ろしい予感が、もはやそれが確かな事実であるかのような抜き差しならない異常に緊迫した現実感を伴つて、全身を嵐のように駆け抜けて行くのをどうすることも出来ないでいた。

（馬鹿げている。どうしてこんなことを考えたのだらう）由利はしかしそれを強く否定しながらも、思はず背後の暗黒をもう一度振り返つた。いつまでも残像として残つていたさつきの列車の赤い後尾燈が、ふたたびまるで見えない手に曳ひかれてもするかのように暗黒をするすると遠ざかつて行つた。由利の半ば閉じた眼はそれを明らかに認めた。そして、その赤い燈は、駅の東はずれの三線の分岐交叉しているあたりで、ちらちらとまたいたかと思つと掻き消すように消えた。と同時に、彼は、

今一羽の鳥が強く羽ばたいて足下からその暗黒さして飛び立つて行つたのをはつきり耳にしたように思つた。だが、それらは二つながら多分錯覚であり幻聴であつたのだろう。前方の信号燈の一つが赤から青に変わり、同時に西風が強く砂塵さじんを捲きあげたのにすぎなかつたから。

## 1

その翌日は土曜であつた。

朝からどんよりと曇つて底冷えのする厭いやな天気だつたが、年末景氣を控えたキタ梅田、ミナミ心齋橋をはじめとする市内の各盛り場は、暖かい小春日和に恵まれた先週の土曜ほどのこともないが、それでも午後になるとさすがに身動きならないほどの人出だつた。由利も渡辺助教授の今年最後の講義を受けてそのM——大学の所在する大阪西郊の住宅都市I——市から梅田に帰つて来ると、そのまま梅田新道を南へ中之島さして人波を縫ぬいはじめた。

昨夜は余程疲労していたのでだろう、なんの夢も見ずにぐっすり熟睡したせいか、彼はもうすつかり元氣を回復していた。それどころか、こうして盛り場の雑沓もに揉まれ、あちこちの街角から響いて来る狂おしげなジャズの旋律を耳にしていると、妙に心が浮き浮きして来て、昨夜のあの奇怪な妄想の虜とりことなつていた自分が、いかにも馬鹿げていて狂氣じみていたようにさえ思えて来るのだつた。

実際昨夜はどうかしていたのだらう、今朝眼をさますなり朝刊を手にしてみたのだが、紙面のどこにも彼の予想したような転覆事故の記事は見当らなかつたし、不吉な電報も舞い込んで来はしなかつたのである。変つたことと言えば——彼の表情は少しの間曇つた。それはただ一つ、このところあと

数日に迫った学期末考査にそなえて、連日夜遅くまで勉強をつづけている弟の聡が、何を思ったのか、朝食の最中に、聡の表現を借りれば、彼個人のことで、由利に相談があると言いつ出したことだけだった。もつとも聡はただそれだけを思い切つたように言つただけで、肝腎の相談の内容については、朝食後も何一つ話し出すことも出来ないで、結局それは午後を持ち越されてしまったのである。

(しかし、本当に一体なんの相談があるというのだろう) 疑つてみると、聡は、その「相談」のために母のない彼の家庭で父が出張旅行に出かけて由利と二人きりになる機会を待つていたふうに見られないこともなかった。(もつとも母の存命中からも家にいて家族同様にして今では由利家の母代り兼女中を務めている、母の遠縁にあたる彼らが「キクさん」と呼びなれている瀬尾キクという今年六十歳になる老婆がいたが、これは無論、論外だった) それに第一、聡が改まって相談を持ちかけること自体が不審なことだった。絶えてないこと、いや考えてみれば、由利兄弟の生活史における全く最初の出来事であった。と言つても、兄弟仲が悪かつたというのでは決してない——ただ、この由利家の二兄弟には、二人で相互に自分の希望なり悩みなりを打ち明けあう習慣がなかつた、つまりそうしたことは何か「照れ臭くて」或いは「晴れがましゆうて」出来なかつただけのことだった。もつとも、このことは事新しく述べるまでもなく、案外どこの家庭でも多かれ少かれそうなのかも知れないが、父に対してもそれは同じだった。本当なら普通こうした場合に仲介役をつとめる母がいなくてもつと親しく話し合つたらよきそうなのだろう(由利自身は実際そう思っているのだった)が、どうしたわけか事が重大になればなるほど打ち明けにくくなつて、これはかの母と息子の間の往復書簡をまとめて出版した某女史のベストセラーにならつて手紙でも書くべきかなと思つてもしばしば

であつた。そんなとき由利は、父と聡と彼の三人はお互いに測り知ることの出来ない別々の世界に生きていて、食事とか噂うわさばなし話とか映画見物とかそんな一番つまらない俗的な面で触れ合っているのかも知れないなどと、幾分感傷的になるのだつた。

ともあれ、その絶えてないこと、いや、はじめてのことを、聡はしようとしている——それも、わざと父の代りに由利を選んで。

(恋愛問題だろうか？ とんでもない、あの聡にかぎつて)——由利の出身校の岡寺中学の後身、府立岡寺高校二年の首席を占める由利聡にかぎつて、そんな間違いがあろうはずはない。(とすると、問題は将来の志望についてであろうか？ しかしもうそれならとつきの昔に決定済みだ。東大の理科を受験、行く行くは医者になると。それに、それは何も今日ぜひしなければならぬものでもない)だが聡は、由利が「それじゃあ相談は今夜にでもゆつくり聴こうか」と言うと、怖い顔で「ぜひとも今日の夕方までにせな困るねん」と答えたのである。

そんなわけで、由利はちょうど今日の午後友人の長沼広を、久しぶりに、と言つても彼らのことだからこの前会つたときから二週間しか経っていないのだが、中之島のM——大医学部に訪ねることに心決めていたので、それならついでにその玄関前で三時に会おうと約束したのだつた。

もつとも医学部は中之島と言つてもずっと西はずれにあつたからこのまま行くとかなりの廻り道となるのだが、これもついでに今頃ずっと御無沙汰ごぶさたしている中之島付近をゆつくり散歩して行きかけたのである。

空は相変らず曇っている。頭上低く一面に垂れこめた鉛色の厚い雲は去る気配もなく、おそらく今



夜あたり一雨来ることは確実だった。それでもときどきどうかした拍子に雲が切れ、冬の午後弱い日射しが彼がよく現像を頼んだりする堂ビル前のちつぽけなD・P屋のショウ・ウインドウを暖かく照らしたが、それもほんの束の間で、これからの長い冬を物語る冷たい空気がすぐとつて代った。

やがて中之島だった。由利は生粋きつすいの大阪人だけに大阪の街が好きだったが、ことに中之島一帯のビルディングと水と橋の醸しだす東京ではちよつと見られない特異な風景を愛していた。堂島川の水には澄んだ清流の美しさはなかったが、光線の加減で暗緑色から時として暗紫色までのヴァリエーションを見せて都会美をそえるのに十分だった。もつとも今日は冷えこんでいるせいか、いつもなら雑沓をどこ吹く風と悠々ゆうゆうと大江橋の上から釣糸を垂れている太公望の姿は見当らなかつたが、彼は満足だった。そして、気がかりな弟の相談のことも、いつのまにか忘れるともなく忘れ去っていた。

長沼広には、彼らの共通の友人である田中俊治——今は彼の「宣言」に従って「朴圭植」と呼ぶべきであろうが、その田中のことで話があるのだった。もつともそれも今日必ずしなければならぬものでもなく、また前もつて約束してあるわけでもないの、あの怠け者のことだから、この前会ったときには「これからはちゃんと講義に出るよつてな、会いたかつたら大学へ来い」などとえらそうな口をきいていたにしても怪しい話だった。それに話があるとつても、どうせ長沼はいつものように彼一流の全くやりきれなくなるような例の皮肉な微笑を浮かべて、ふんふんと冷淡に相槌あいづちを打ちながら聞き流すのが関の山であろう。

(ほんとに、あいつには全くやりきれなくなるときがあるな) そう心の中で誰に言うともなくつぶや

きながら、由利は、自分と長沼との友情が実は自分一人の幻想であつて、長沼にとつては由利なる人間はなんらの価値をも有していないのではないか、と思つてみたりした。いや、この由利より一歳年長のシニツクにとつては、由利との友情ばかりでなく、田中との、また他のどの人間との関係も多かれ少かれそんなふうであるのかも知れなかつた。考えてみると、よしんば今度田中の「宣言」した内容を由利同様に長沼がこれまでに全然知らなかつたにせよ、そんな「宣言」などは、彼にとつては何ほどのこともないのではないだろうか？ 由利にとつては、それは明らかにシヨッキングな事実なのだが――

今日だつて、会えば会うで、いつものように胸の奥底を鋭利なメスでぐいと抉り出されたような不愉快な気持ちになつて別れる――この前会つたときと同様に、もう二度と会うものかという決意さえ抱いて別れるだろう。彼にはそんな自分もはじめから判つていた。が、それでいて、彼は自分からわざわざこうやつて会いに行こうとしている。

由利は、そんな優柔不断な、いつまで経つても長沼の影響下から脱け出し得ない自分をふがいなく思いながら、長沼の顔はまさに彼自身が自負しているようによく映画で見かけるシカゴのギャング面だ（眼の落ち窪んだ眼光けいけいといった彼の顔は、彼愛用の古ぼけたアメリカ中古品の鍔の広い中折帽をわざとくしゃくしゃにしてかぶつて、これもアメ中で金二五〇〇円の灰色のダブルのオーバーの襟を立てると背が高いだけに実際そう見えた）が、あの顔がいつもの冷笑でなくて本当に笑うとき、或いは長沼に劣らず口の悪い友人連中に言わせると、何かうまいものを前にするとき、五、六歳の、いや三、四歳の幼児そっくりの無邪気な表情になるのは、あれはどういうわけなのだろうか、

案外そんなところに彼の魅力の秘密があるのかも知れない、などと考えるともなく考えていた。

田中の「宣言」というのは、由利が一週間前に受け取った一通の手紙のことだった。近頃ずつとなんということもなく疎遠になつていた彼から手紙を受け取ること自体が意外だったが、中味は更には思いがけなかった。中には一枚の便箋びんせんがあるきりで、それには「内々は知っていられたことと思うが、ずつと黙っていたのではつきりしておきたいと思つて手紙を書く」という書き出しで、自分が実は朴圭植（これは [Bak kjan stik] と読む、と注釈があつた）という朝鮮人であることを述べた後に、「君もこれから日本人田中俊治の友人ではなく朝鮮人朴圭植の友人となつてほしい」と結んであつたのである。

勿論もちろんこのことは由利をはじめ岡寺中学時代のクラス・メートの誰もがうすうすは感じていたことであるし、口の軽い二、三の教師が「あいつはああ言つてもれつきとした朝鮮人やで」などと怪しからぬことを口走つたこともあつたのだが、こんなふうにはつきりした「宣言」を突きつけられることは、岡寺中学の四年生以来ほとんど六年に近い交際の由利にとつてはやはりショックな事実だった。それに彼が日本人であろうとなかろうと由利の感情にはなんの変化もあり得ないはずなのに、これまで故意ではないにせよそれを隠し通して来た彼に対して、由利はいささか長年の友情を傷つけられたような不快感を持つたことも否めなかつた。しかし、長い間友情を結んで来た者に対して、実はこうだつたと告げるのは親しいだけにかえつて辛いことであるのに違いなかつた。おそらく適当な機会がなかつただけのことだろうが、それだけに、もしかしたら、由利たちに対して、今までの二重

籍者めいた立場を清算しておきたいという意味のほか、深い裏面の事情が伏在するのも知れなかった。日が経つにつれて、由利はその想像がなんの根拠もないながら幾分でも当たっているような気がして来て、こうした事情に迂闊うかつな自分よりもきつと詳しい情報を有しているに違いない長沼に「知らぬは主ぬしさんばかり」と皮肉られるのを覚悟しながら訊たずねてみることにしたのだった。

今は学制改革で岡寺高校となっている岡寺中学へ戦後に彼らが入学していたとしたら、朴も「田中」という（彼の手紙の表現に従えば）「忌むべき仮名」の下に登場する必要はなかったであろう。が、彼らの入学は、ちょうどあの戦争が破局的な段階に突き進むとする頃であった。もつとも、おそらく正式の学籍簿では「田中俊治」は「朴圭植」に変化していたであろうが、終戦後も教室での出席簿上では、従つて教室自体の中では、彼は依然として田中俊治であった。それは戦後になつても一向変ろうとしない民族感情を恐れての学校当局或いは家庭の配慮によるのかそれとも他の理由によるか知る由もないが、卒業式の当日講堂で順に呼ばれて行く名前の中には、田中俊治はあつても朴圭植は存在しなかつたのである。こうして岡寺中学生生活五年を通じて、秘密と言えば少し大袈裟だがそれは保たれていた。

と言つても、秘密のヴェールは何かの拍子に透すけることも間々あつた。戦後二年目岡寺中学四年のとき、朴の友人となつたそういうことには至つて鈍感な由利にも、今から考えてみると思いあたる節が幾つかあるにはあつた。

第一、彼は自分のことはおろか自分の家族についても一言も進んで語ろうとしないのだった。自然由利の方もそうした話題を意識的に避けるようになり、今もつて由利は、彼の家庭については両親が

健在だという以外には何一つ知らない状態なのだし、朴自身は由利の家にはしばしば遊びに行きながら、自分の家に由利を誘うことも絶えてなかつたのである。

いつだったか由利は何かの必要に迫られて布施の彼の家を探したこともあつたのだが、そのときは結局判らずじまいで、交番に訊ねてみてもその住所には「田中」なる家は存在しないというのであつた。交番の中年の巡査はそう答えてから、うさん臭げに彼を上から下まで睨み廻しながら「あの辺は、**チ、ヨ、ウ、セ、ン**が多いからな、あんたの訊<sup>き</sup>いてるもそやないんか」とつつけんどんに付け加えたのだが、それも今から考えてみるとうなずけることだつた。そしてその翌日、彼が「君の家を昨日探したけど判らへんかつた」と言うと、田中は露骨に厭な顔をしてみせたので、それ以上追求することもできなかつたのである。

それに由利は、田中が自分たちとは別のもう一つの友人たちを持つていることも、うすうす感づいていた。街でそうした友人と連れ立って歩いている彼に出会うことも二、三度あつたが、そんなとき、彼は由利にその友人を紹介するのでもなく少し狼狽<sup>ろうばい</sup>したふう<sup>ふう</sup>に立話して別れるのが常だつた。その中の一度だつたかは由利が背後から近寄つたとき、彼は確かに田中が朝鮮語らしい言葉で喋<sup>しゃべ</sup>っているのを耳にしたのである。

こんなことを数えあげて行けばきりが無いが、一つだけ由利の心にまだ生々しく残っている記憶があつた。昨年ちようど朝鮮戦争の勃発した頃の話<sup>はなし</sup>のだが、いつか喫茶店で久しぶりにコーヒーを飲みながら駄弁<sup>だべ</sup>つたことがあつたのである。そのとき、どういふキツカケからか話が朝鮮戦争のことになり、やがて自然に話題は戦争の原因——つまり、侵略者は南・北鮮のどちらか、という駄弁を弄す

るには余りにも重大な問題になったのだが、うかつにも由利は「そりやあ勿論北鮮やで」と何気なく新聞の受け売りをしてしまったのだ。田中の顔色は一瞬蒼あおざめた。しまった、と思つたがもう手遅れだった——が、田中は、ただ一言、強いて怒りを落ちつけたようなわざとらしいもの静かな口調で、「君にとつては他人事やからな」と答えただけであつた。

君にとつては他人事、である限りは、それは無論、自分にとつては他人事でない、ことを示していた。いくら鈍感な由利も十分それ位のことにはわきまえていたのだが、ただ田中は表面的には全くの日本人であり、日本語も由利と同様の大阪弁を自由に何一つよどむところもなく喋つていたから、たとえ彼が朝鮮人であろうと、日本生れで、しかもすでに日本に帰化したものだとして勝手にきめこんでいたのである。それになんと言つても「君は朝鮮人だね」などと戸籍調べすることは、民族的偏見の有無にかかわらず出来にくいことであつた。

こうした状態が二人の友情の全くの発端からつづいていた。二人の結びつきは先にも述べたように岡寺中学四年のときに始まるのだが、たいていの友情の起源がそうであるように、なんの劇的な事件もなく至つて平凡に行なわれた。つまり、偶然クラスが一緒に、席が隣り合わせだったのである。

当時、田中は熱心な文学少年であつた。年頃の少年らしい感傷的な詩を幾篇か書いては校友会の雑誌に投稿したりしていたが、それらは由利の眼にもたいして優れているとは思えなかつたのも事実だつた。しかし作品はともかくとして、彼は由利を相手に連日のように幼稚な文学論を熱情的に語り、数学や化学などを詰め込まなければならない現在の馬鹿ばかげた生活を憤つた。文学論は由利には無縁だつたが、後者は、同じように理科系の学科が一向に振るわない彼だけに大いに共鳴するところが

あつて、とうとうろくすつぽ小説も読んだことのない彼までが尻馬に乗つて文芸部に入り、あげくの果てには、田中を介して、当時一年休学して彼らと同学年となつた、学校をほとんどサボつていつも室でゴロゴロしていた長沼広を知る光榮にまで恵まれたのである。もつとも、由利は田中式の感傷的な詩さえ作れず、長沼広から「平凡にサラリーマンになるべく運命づけられた星廻りのすこぶるよい男」という御託宣をいただく始末であつた。

しかしそうは言つても、田中は年中教師を困らせてばかりいる長沼流のシニックでも反抗児でもなかつた。(入学第一日の漢文の授業から、「ここに天下万民とありますが、当時の人口はどれほどでしたか?」と人をお腹食つた質問を出して教師を困らせたという長沼のその悪癖は年と共に進んで、最後にはヴェルギリウスの抒情詩と称する、おまけにその大意が彼に言わせると、「おれはお前が好きだからアレがしたい、ああ早く、一刻でも早くしたい!」であるという怪しげな自作のラテン語の詩を教室で堂々と朗読してみせるまでになつた) 田中の方は、一時こんな長沼にかぶれてニヒリストめいた仮面をかぶつたこともあつたが、本質は健康的で体も大きく骨組みもガツシリしていて、文芸部に入る前は岡寺中学ラグビー部のホープと目されていただけに、「気はやさしくて力持ち、まさに健康優良児」などと長沼に皮肉な折紙をつけられる真面目な少年だつた。

学業成績の方は由利と大差ないところで、四年には京都のS高を狙つて二人ともきれいなにはねられ、翌年地元の高へこれまた二人そろつて無事に入学出来たのだが、新学制の実施でたつた一年白線帽をかぶつただけでまたもや新制大学の入試を受け直す、つまり新制高校卒業者と同じ入試を受けなければならぬ破目になつたが、これもどうやらこうやら、無事M——大学へそろつて入学出来たの

である。

ところで、岡寺中学卒業の少し以前から、由利は田中の内部に微妙な変化が徐々に起りつつあるのに気づいていた。当時の世界情勢の急激な変化が彼の心に正當に反映したのだろうか、彼らが岡寺中学を去る頃には、彼はもはやかつてのゆめみがちな文学少年ではなかつたのである。由利にはまだ何事も明かさなかつたが、彼は、当時彼が中心となつて組織した「社会科学研究会」の友人たちと共にメーデーにも参加してゐたのだつた。

由利は後になつてそれを他の友人から聞いて文字通り目を瞠みはつたのであるが、しかし彼の方は勿論それに刺戟しげきをうけて社研に加入したりすることもなく、ただ友人の変貌へんぼうを何か恐ろしいものでも見るように傍觀するにすぎなかつた。二人の間の距離は、こうして徐々に拡がつて行つて、大学は同じM——大学でも、田中は文学部の国史学科、由利は平凡に法学部を選んだおかげで、二人の仲は会えば話をするという程度にまでなつてしまつていた。しかしそれでもどうしたわけからか、田中はときたま長沼を訪ねることもあつたらしく、長沼はそのあとで「アカがこないだ来た」と例の真面目なよきな茶化してゐるような口調で告げるのだつた。

その田中、いや、朴圭植が不意に彼の「宣言」なるものを寄越したのである。やはり、今は疎遠になつたとは言え年来の友人である由利にも真相を告げておきたくなつたためなのだろうか、由利には、だが、それが前にも述べたようにそんな単純な理由からであるとはどうしても思えないのであるのだつた。すくなくとも、ここには一つの決意がある。重苦しく厳しい、嵐にも耐え行かんとする決意があ



る——彼はそんなふうにさえ感じた。

由利がこうした考えごとに耽りながらM——大医学部に着いたのは二時半であつた。堂島川をはきんで煉瓦建の妙に平べつたい大病院と相對しているこの薄汚れた灰色の建物は、学校と言うより悪く言えばまるで倉庫だ——由利は入りぎわにちよつとそんなことを思ったが、彼の心から聡との約束はもうすつかり跡形もなく消え去つていた。あと三十分で聡はここに来るはずなのだ——

しかし案の定めぎす二階の教室には長沼の姿は見えなかつた。時間には間違ひなかつた。階下のアーケードに大きく掲示された講義時間割に、長沼は自分の受ける講義だけ来客用にチェックしていたのだつた。

彼のことだから仕方がない、と別に腹を立てる気にもなれず、由利はそれでもやはりにわかには疲れが出て来たような重い足をひきずつて消毒薬臭い教室を離れた。もう休暇近いせいとか、学生の数は少ない。

階段の降り口まで来たとき、誰かが不意に肩を叩いた。驚いて振り返ると、当の田中が微笑している。不意を衝かれた形で、由利はいささかうろたえながら、

「なんや君やつたんか、びつくりしたがな」

と、ただそれだけ言つたが、急にこの眼の前に人なつこく微笑している男が彼のよく知っている「田中俊治」ではなくて、今まで見も知らなかつた朝鮮人朴圭植であることを思い出して堅くなつた。

「あのオッサン、ひどい奴や。ちゃんと約束しておいたのにきれいにすっぱかしよった」  
が、朴の眼はそう口では憤慨しながらも、相変らず柔和に笑っている。

「その辺の奴に訊いたら、ちつえきけんさ膿液検査に出かけよつたと言うんや。例のアレや、アホらしゆうて怒る気にもならへん」

「チツエキ検査？」

まだ判らないのかとでも言うふうには、朴は由利の肩をぐいぐい押した。その仕草で、彼もすぐその長沼らしい聞くからに悪趣味な露骨な表現の意味を了解した。今頃長沼はきつと「飛田」の女を抱きながら彼の言う「膿液検査」を試みていることであろう——いつもながら長沼の為すこと言うことは、そんな経験に乏しい、いや残念ながら皆無な由利には、少し強すぎる刺戟だった。

やがて、二人はどちらからともなく階段を降り始めたが、このまま別れてしまう気にもなれないままに「どこかで喋ろうか」と珍しく由利が誘った。朴はうなずいて自分の方から先に立つて行きながら、低声で付け加えた。

「ちようどいいや、君に頼みたいこともあるんだ」

玄関には、もう定刻十五分前なのだが聴の姿はなかった。もし聴がそこにいたら、由利もたちどころにその約束を思い出したことだろうが、彼はなんの躊躇ちゆうちよするところもなく、朴に続いてすでに夕闇のほかに漂いはじめた街頭へ足早に出て行ってしまった。

しばらく歩いた後に、二人は、ある高名な原子物理学者をしばしば見かけるといふ朴の説明つきの

「もり」と呼ぶ一見したところしもた家ふうの風変りな喫茶店に入った。暖房の熱気が扉を開けると同時にむつと頬ほおを打った。中では二、三人の学生が低声で喋り合っているきりだったが、誰が聴いているのかラグビーの実況放送が狭い店内一ぱいにわんわん響き渡っている。朴も座に着くとしばらくそれに耳を傾けているふうだったが、不意にいかにも残念そうに「K大が負けよる」と舌打ちをしなからつぶやいた。そんないつもと少しも変らない彼を見ながら、由利は、もうこの友が自分から遠く去つてしまったことを、ことに今度は、今まで想像もしていなかった外国人という立場に去つてしまったことを考えていた。取り返しのつかない距離が、もはや二人を決定的に隔ててしまっているかのようにあつた。

コーヒーを運んで来たまだ十七、八のお下げのウェイトレスを目顔で指しながら、朴はにやりとして低声で言つた。

「あれがね、オッサンの惚ほれてた乙女や。オッサンの言によると、あのよれよれの木綿のスカートにつぎのあたつた哀れなる風情がアンデルセンのマッチ売りの少女そっくりでなんともしえん、それはつまり人間の嗜しご虐ぎゃく本能ほんのうをそそつて強姦かうかんしたくなると言いつて、十一月中に旅館へ連れ込まへんかつたらばくにここでコーヒーを奢おごると賭かけよつてん。そこまではよかつたんやが、調子に乗つてうっかり、どうやつてそれが判る、と訊いたら、あいつ、彼が発見したいいう処女鑑別法を大声で講義し出しよつてな、それも心齋橋の真中でやで……」

そこまで辛うじて言うくと、朴はとうとう笑いを堪えかねたように愉快そうに大口開けて哄笑こうしょうした。釣り込まれて由利も笑つた。「オッサン」と「あいつ」の微妙な呼称の使いわけが、今の朴の心情を

よく表わしているかのようにだった。

「それでぼくは実を言うとその結果を聞きに来た、というわけでもまさかないけど、そしたら、オッサン、きれいにすつぽかしや。もつともあいつのことやから、今度会つたらケロリとして、《我が舌は誓つたが、我が心は誓いはせぬ》とぬけぬけ言いよるやろうが」

「なんや、それ？ その《我が舌は》いうケツタイな文句は」

「オッサンお得意のギリシア語やないか。オッサンの逆鱗げきりんにふれるぞ、ユーリーピデスの——と言うたらあかん、怒られるわ、エウリーピデスのこの名文句を知らん奴が世の中にいるとは、とかなんとかモツタイつけよつてな」

由利は顔を赤らめた。つまらないことに赤くなるな、と自分で思いながら、それだけ一層赤くなった。「やつぱりあれかい、長沼は今でもギリシア語やっているんかい？ 変な医学生もあつたもんやね。あいつはS高では確か文科やつたんやろ？」

狼狽を押し隠すように由利が早口に言うと、朴は大きくうなずいた。勉強しない癖に一夜漬けの名人だった長沼は、S高を狙つて一回目は由利・朴と三人仲よく落ちたが二回目には首尾よくパスしたのだった。ところがそのS高文科を新制度の実施と共に放り出されると、彼は今度は何思つたのかM——大の理科に潜り込んだのである。もつとも理科に入つてからも、S高時代にこれも何思つてかやり始めたギリシア語をつづけて肝腎の理科の方の勉強はそつちのけの有様だったが、それでもとにかく無事後期の医学部の入試に、彼自身の皮肉な表現をもう一度借りれば「由利が詩人になると等しい奇蹟率でもつて」合格したのだった。

「そやけど、まああいつのギリシア熱もひと頃みたいなこともないな。医者になつてくれてこつちも助かるというもんや、前は何しろわけの解らんことを言うて盛んに煙にまきよつたからね。と言うても、例のアレは、例の《アリストパネース式ダイアローグ会話》というやつは一向に變らんけどな」

二人はまた期せずして笑つた。《アリストパネース式会話》は（アリストパネースこそよい面の皮だ）朴が心齋橋で閉口したという調子を指していた。実際、長沼は、どこでも、そしていつでも、そいつをやり始める。この間も、梅田の人混みの中で、トリコモナス原虫の所在について長々と一席ぶつたあげく、しゃあしやあとしてうそぶくのだ。つまり、話し手のおれはサデイスティックな快感を、聞き手のあんたはマゾヒスティックな快感を同時に味わうわけやから損得なしや。その証拠に、どうや、アリストパネース流に言うたら、お尻の下がムズムズして来たやろ——

「長沼は、しかしなんでまたギリシア語やめて医学部なんかへ行きよつたんやろか？」  
由利は改めて訊ねた。

「さあね、ぼくもよく知らんな。ギリシア語が出けへんから諦あきらめたとも言いよるし、ギリシア語なんかこつこつしていると一向に女にもてんよつてやめたとも言いよるけどな。そやそや、いつかこれがほんまの理由やと言うとつたな。なんでもね、例のアリストパネース先生の或る作品の中に、女が《私の子宮の縁を赤ん坊の足が叩いとる》とか馬鹿なこと言いよる場面があるんやそうや、そいつを讀んだとき、先生、翻然とさよつた、その子宮の縁なるものを一生かかつてトックリ叩いてみようかね。それで、オッサン式の言い方をすれば、産婦、人科医になるべく運命づけられたというわけや」

朴は半ばまで真面目くさつて聞いていた由利を、ちよつと気の毒そうに見るとアツと吹き出した。

どこまでも人を食った男だ——軽い腹立たしさを覚えながらも、由利も大声で笑い返した。二人の笑い声が余り大きかったので、さっきのウエイトレスが彼らをちらと見たほどであった。

しかし、もうその笑い声に長沼の噂話もピリオドを打たれた形で、笑い声がしずまると二人は真面目な顔に戻ってしばらく黙っていたが、やがて朴が少し言いにくそうに軽く吃りながら沈黙を破った。

「それはそうと、君、手紙読んでくれた？」

由利はうなずいた。が、何も言わなかった。朴はその沈黙を「今までなぜ隠していたのだ」という非難の意味にとつたらしく、幾分弁解がましい口調で急いで畳みかけるようにつづけた。

「やつぱりはつきりさせておきたかったからな。びつくりしたと思うけど、他意はないんだ」

「はつきりさせるって何を？」

朴はそう当然の質問を由利が投げかけるのを待つてましたとばかり、彫りの深い長沼の顔とは対照的なこの民族特有の少し間延びのした浅黒い顔にまた微笑をたたえた。

「無論ぼくが朝鮮人であるってこと、いいや、それよりさ、ぼくの気持だね、そいつをはつきりさせておきたかったんだ。ぼくはね、ほんとは大学に入ったときから、はつきり朴圭植でいたんだ。君は学部が違うから知らんやつたろうけどね。ぼくも悪いと思つたけど、黙っていた、君にばかりじゃない、長沼にだつてそうなんだ。それはね、由利、わかるかい、こうなんだ」

朴の口調には、もうさっきの長沼の噂話をしたときのくだけた大阪弁は跡形もなかった。それは議論の重要性を示していた。由利も心持ち緊張した面持ちで、一つ一つ生真面目にうなずき返した。

「まずぼくの経歴を言うかね、ぼくは濟州島の生れなんだ。生れてすぐ父に連れられて日本、じゃな

い、内地へやって来た。父は向うで食いつめてね、内地——ぼくはこの言葉に特別の意味をこめて言っているんやぜ、その内地に来るようになったんだ。その頃、朝鮮人、じゃない、半島人の出稼ぎをいっぱい乗つけて大阪と島の間を往復している千トン足らずのちつぽけな船があつてね、そいつの三等船室にかんづめ罐詰になつてやって来た。それから？ それからはね、ずっと大阪で、そう小学二年のときまでいた。そのとき母が結核になつてね、父をおいて母と二人で島へ逆戻りさ。四年向うにいて、六年の二学期にまたこつちへ来た。それつきりさ、無論今帰ろうたつて帰れやしないが……」

朴はコップの底に残つた少量のコーヒーをスプーンで器用にすくい上げては口にやつた。それを見るときもなしにぼんやりと見ながら、由利はやけにコーヒーを掻き廻した。

「この経歴の示す通りね、ぼくはほとんど日本で育つた、ことに人間の一生にとつて最も重要な精神形成期をね。それがどんなことになるのか、君には判るかい？ 判らないだろうな、なつてみないことには、こいつは判らないことなんだ」

「……………」

「ぼくは朝鮮人であつて、しかも朝鮮人でなくなっているんだ。例えばぼくの朝鮮語だ。これだつて少しは下地はあるにはあつた。だけどね、ぼくは結局終戦後に全部ABCからもう一度習い直したのだぜ。え、ほんとにこんなことつてあるかい？ 母国語をABCから習うなんて。しかもね、由利、ぼくは君たち侵略者の忌まわしい言語はすらすら喋れるのだ。判るだろう、おれのケースはフランスに生まれた日本人の子供がフランス語が出来る癖に日本語が出来ないというのとはまるつきり違ふのだ。つまりおれの喋ることの出来るのは、自分を侵略し搾取し苦しめた奴らの言語なんだ。ほんとに

こんなことつてあるかい？ 今だつてなかなか朝鮮語で小説は満足に読めやしないのだ。まだ南鮮のはいい、漢字が多いからね。ところが肝腎の北鮮の方は漢字をほとんど使用しなくなっているから、ときどき判らなくなる。そんなとき、ぼくはいてもたつてもいられなくなるんだ。由利、君には判るかい？ この気持が……」

由利はうなずいた。しかし彼の眼は、いや彼の心は、あらぬ方を向いている。一匹の冬の蠅がすぐ傍らの窓ガラスをのろのろと這<sup>は</sup>つっている。それに物憂げに眼をやりながら、由利はふと、なぜかしら自分たちに似ているなと思つた。

「書くことだつて同じだ。まさにわれわれの英作文に毛の生えた程度さ。日本語を通じて朝鮮語を考える。朝鮮語を日本語に翻訳して考える、こんな朝鮮人つてあるかい？ それがやりきれないことにぼく自身なんだ。いいや、ぼくばかりじゃない、この日本にいる朝鮮人の多くがそうなんだ。ぼくはまだいいさ、すくなくとも自分の祖国をこの眼で見ている。しかしね、ぼくの弟ときたら大阪しか知らないんだ」

彼に弟があるなんて、聞き違えでなかつたらおそろく初耳だ、と由利は思つた。しかし黙つていた。「ぼくはね、ずっと迷つて来たんだ。初めは、ぼくもやつぱり帰化しようと思つていた。民族的自覚なんてものはこれつぽつちもない。もつともそうは言つても、ぼくはまだほんの子供だつたから無理もなかつたけど、しかしね、それにしても、正直に言うると子供心にもやつぱり厭だつたんだ。自分が朝鮮人だつてことが、たまらなく厭だつたんだ。劣等意識とかそんなもんじゃない、ただね、ぼくは何よりも日本人だつた、考え方も、言語も、他の何から何までそっくり日本人だつた。つまりね、朝



鮮人の世界こそ異邦人の世界だったんだ」

朴はちよつと言葉を切つて自嘲じちやうするように微笑した。

「ちよどぼくのケースはね、今まで継母だと知らなかった息子が、実はお母さんは継母なのだと教えられたみたいなものなんだ。勿論この継母は、御多分にもれず継子イジメばかりしていたんだが、子供の方は余り突然のことであつて戸惑いしてしまつて、やさしい実母が引き取りに来ているのにならぬ。いつまでも継母のところであつて戸惑いしてしまつて、やさしい実母が引き取りに来ているのにならぬ。それなんだ、由利、ぼくの場合は！ お恥かしいことながら、ぼくは日本の作家になりたかつた。ぼくだつて人並に志賀直哉先生なんでもものに憧あこがれたんだからね」

「それがあの文芸部の頃かい？」

「うん、まあそうだね。今から考えて、最も恥すべき時代だつた。ぼくは無定見に無自覚に生きていた。いわばその日暮しき。それがね、岡寺中の五年になつたときだつたか、朝連で国史——と言つたつて、無論朝鮮史のことだが、その輪読会が開かれるようになったんだ」

「……………」

「それが、由利、ぼくの眼を開いてくれたんだ。国史を読むことによつて、それも一人で書齋に閉じ籠こもつて読むのではなく、同じように虐げられ迫害されて来た同胞と討論し合いながら一緒に読んで行くということによつてね、ぼくもやつと判つて来たんだ、今まで自分が見、体験して来た迫害の真の意味がね。大袈裟だと君は言うかも知れないけど、君には判るまい、ぼくらがどんなにいじめ抜かれて来たかつたことが。ほんとに幼いときから、ぼくらにはね、君たち日本人に迫害され続けて来たんだ。

しかしね、国史をそうやって読むまではね、その苦しみはいわば自分一人だけの個人的なものとしてしか感じとられていなかったんだ。ところが、そいつが国史をみんな読んで読むことによって、朝鮮民族全体の苦悩としてぐうつと胸に迫って来た。これがぼくの民族的自覚と言えば言えるだろうな。それにね、ね、君は一九四八年というのはどんな年だったか憶えているかい？ われわれの卒業した年さ」

由利はかぶりを振った。彼が記憶していることと言えば、彼らが岡寺中学を去り〇高に無事入学出来たこと以外にはない。朴は、だが、由利がかぶりを振ることを予期していたように軽くうなずいてつづけた。

「二・一ゼネスト禁止令以来アメリカの政策が百八十度転回したことは君も知ってるやろうけど、それは四七年のことだから、その翌年、と言えば話はもう判ったようなものだけど、朝鮮ではもっと大変なことが起ったんだ。こんなこと君はおそらく憶えてくれないだろうけど、二月にね、北鮮の方で朝鮮人民共和国の成立が声明されて憲法草案が出来ると、すぐそいつに対抗してホッジ中將という野郎が、南鮮で単独選挙を猛反対を押し切って強行しやがったんだ。それも公式発表によっても参加率三十パーセントという恐るべき選挙でね、しかも無論非常警戒下にさ。その前に、すでに南北鮮協商会議というのが《外国軍隊撤退・統一選挙》の要求を出していたんだが、勿論こんなのはどこ吹く風と、とうとう李承晩の古狸ふるだぬきを据すえて大韓民国というマヤカシ政府をでっちあげやがったんだ。これで南北は完全に分裂さ。しかしこれだって君にとっては対岸の火事だろうけど、ね、由利、それと時を同じくしてこの日本でも、それもこの大阪・神戸でね、朝鮮人学校事件というのが起っているんだ。そのときどんなことが起ったと思う？ 君は憶えてもいないだろうけど、神戸でたった十

五歳の少年がポリ公のピストルで殺されているんだ。なんの罪もない十五歳の少年がだぜ」

「それいつのこと？」

「あまりかねて由利は言った。」

「四月のことだ。君は知るまいね。君ばかりじゃない、誰だつて知りやしない、日本人の誰だつて！」

ラグビーの実況放送が終り、三時半をラジオは報じた。それを耳にしたとたん、今頃、医学部前で彼を待っているに違いない聡の姿が、神戸で射殺されたという十五歳の少年の血みどろな姿とオーバールップして不意に由利の脳裏に浮かんだ。(今から行けばまだ間に合うだろう、が……)

「どうかしたんか？」

思わず由利が気がかりな視線を外に走らせたのに眼ざとく気づくと、朴は不審そうに、同時に少しばかり非難がましく訊ねた。由利は「いいや、なんでもない」と簡単に答えただけでまた朴に向き直った。

「それでもぼくの覚醒かくせいはまだ完全じゃなかった。ぼくはまだ帰化しようかしまいか毎日迷っていた。考え方も日本人、喋る言葉だつて日本語、そんな朝鮮人なんて、とぼくは思ってみたりした。朝鮮人として生きようか、それともいつそ日本人になろうか、まさに『to be or not to be』だった」

由利はうなずいた。うなずくのを待ちかねたように、すぐ朴は少し声を高めてつづけた。

「そんなわけで、ぼくは君たちに悪いと思つたけど黙っていたんだ。問題はね、ぼく自身の内部に根強く巢食っている植民地人根性だつたんだ。君には、いや、君たち日本人の誰にも想像もつかないことやろうと思うけど、あつちの小学校では、毎朝朝礼のときに『日本臣民の誓』というのを言わせたんだ。《一つ、我等は日本臣民なり》という文句をき、直立不動で言うんだ。子供ばかりじゃない、

大人だつて言わせられたんだ。例えば何か悪いことをして——いいや、別に悪事を働かなくてもさ、例えば巡査の御機嫌が朝方の夫婦喧嘩か何かでちよつと斜めだつたとするとね、奴はその辺の誰かを捉えて、《おい、臣民の誓を言つてみる》と来る。言えなかつたら、そいつは可哀そうに無論ビンタだ。植民地警察なんでものはとにかく大変なものなんだからね。白髪の爺さんがニキビ面の若造の前で《一つ、我等は》なんてうろ覚えの文句をしどろもどろになつてやつている図は見えてられなかつたね。ところで問題はさ、その忌まわしい《一つ、我等は日本臣民なり》がぼくの体内に執拗に残っている、そいつをいくらガンゼない子供だつたにせよ、なんの抵抗もなく後生大事に唱えていた自分が残っているんだ。わかるかい、由利、こいつをはつきり清算しないかぎり、ぼくは朝鮮人ではない」「とすると、君はもう清算したというわけやな」

朴は力強くうなずいた。

「ぼくのふらふらした気持ちに決断を与えてくれたのは、今度の戦争……」

と言いかけて朴は「朝鮮戦争だつた」と言い直したが、その微妙な差に、由利は自分と彼との間に横たわる距離を悲しいまに感じた。

「ぼくはね、やつと判つたんだ。誰がこの戦争を惹き起したかを考えているうちに、やつと何を為すべきかが判つて来た。これでぼくの立場ははつきり決まつた。今こそね、はつきり」

「立場というと、君は北鮮の方だね？」

自信なきように朴の反応を窺いながら、由利はようやくくちばしをいれた。

「勿論だよ。君は知らないだろうな、一体この日本にいる朝鮮人の中で北鮮系——厭な言葉だけど、

今はまあいいや、それと南鮮系とどっちが多いか？ ぼくが持たされている例の忌まわしい外国人登録手帳というのにはね、《国籍 朝鮮系》なんていかにもうまい表現を使っているけど、こいつの方が、由利、《国籍 大韓民国》より比較にならないほど多いのだ。イデオロギーなんてものじゃない、民衆はそんなこと知ってやいないさ。問題はねえ、どっちの政府が自分たちをほんとに幸福にしてくれるか？ ということにあるんだ。大韓民国になっている連中の中にも、商売の必要からやむをえずそうなっているのも沢山いて、ぼくらがカンパに行ったりすると快く出してくれるんだ。ほんとにイデオロギーの問題じゃない、日々の生活の問題なんだ」

「だけど、君、濟州島は南鮮やろ？」

「君は何も知らんのやな、無理もないけど。濟州島は南鮮にありながら最も勇敢にゲリラが戦った」

朴は急に口をつぐんだ。そして、沈黙したまま暗い顔でさっきの冬の蠅はえの動きをしばらくみつめた。それは、いつ死ぬとも判らない緩慢な動作でありながら、憎々しいほど生きていた。

「ぼくの伯父だつてゲリラに入って戦ったんだ。無知な厭らしい伯父だつたけど、自分の敵が誰かをよく知っていたんだね。勿論殺されてしまった。伯父の家、つまりぼくの本家は完全に焼かれて田畑は没収さ。ところが、由利、その伯父を銃殺したのは誰だと思う？」

朴の声は低くなった。

「伯父の甥おい、つまりぼくの従弟だつたんだ。事は簡単明瞭さ、なんの不思議もありはしない。従弟は南鮮のポリ公だつたんだからな」

（どう答えるべきだろう？ 確かにこれは悲劇だ）由利には、だが、もうこの種の悲劇ならこれまで

にも聞き飽きる位聞いたことがあるように思えた。そしてその悲劇の内容自体よりも、九州の眼と鼻の先にある済州島から伯父の死の報知を受けたのは、それから一か月もあとだったということの方が彼を恐怖させた。

「ぼくの目覚めにはこんな犠牲があつた。ぼくばかりじゃない、ぼく一家のね。そりゃあ父はぼくみたいなアイノコの悩みは持つていないさ。でもね、こちらに来ている朝鮮人には、多かれ少かれみんな根無し草みたいなのがあるんだ。父だつてそうだ。故郷を出てからもう二十年以上も日本人の中で生きて来た。なまやさしいことじゃなかつた、迫害のされ通し、いいや、今だつて状態は少しも変つてはいないんだ」

冬の陽は急速にかげり始めた。どこからともなく冷気が二人の背後に忍び寄つて来た。由利は寒気を覚えると同時にふと不安になつた。(誰かに、もし、この北鮮系と自称する朝鮮人学生と喋つているところを見られたら!) 朴は、だが、そうした由利の気持も素知らぬげに新生を一本取り出すと、片手で器用にマッチを擦つて火をつけた。煙草ののめない由利は手持ち無沙汰に悩みながら、立ちのぼる紫煙の行方をみつめた。

「ほんとにどんなに虐げられて来たか、どんなにひどい圧制だつたか、君には判らないだろうな。今の日本はアメリカの植民地やと言うけど、どうしてどうして当時の朝鮮と来たらこんななまやさしいものじゃない。想像も出来ないほどのひどい政治が内地の食いつめ者の手で行なわれていたんだ。ことに済州島なんてところは朝鮮本土のそのまた植民地と言つたところだつたから余計ひどかつた。しかし君は、君たち日本人はそんなことがあつたつてことすら知らないでいる」

由利は耐えきれなくなつて、思わず言った。

「そういうけど、田中、いや朴、日本だつて、朝鮮のために……」

由利のその言葉を朴は全身を乗り出すようにして激しく遮った。

「鉄道を作つた、ダムを作つた、え、工場を、学校を作つた、図書館を作つた、と言うのかい、君は？ 正直言つて、ぼくは君までそんな馬鹿げたことを言い出すとは思わなかつたよ。実際どこへ行つてもこうなんだ。おれたちが痛めつけられた話をする、必ず、誰かが、たいてい中年以上の男だがね、こう言うんだ。お話は判りました、ですが、日本だつて私たちの税金であの長い鉄道を敷きました、京城帝大を建てましたつてね。だけど、由利、君はその鉄道やら大学やらが一体誰のためのものだったか考えてみたことあるかい？ アメリカだつて、現に日本に対していろんなことをしてくれているじゃないか。それこそアメリカ人の税金でね。しかし、せいも一体誰のための、なんのためのものなんだ？ とところがこの日本だつて、さつきも言つたけど、あの当時の朝鮮とは比べものにならないほどの独立国なんだぜ。あの頃の朝鮮と来たら、それは、君……」

朴は明らかに興奮していた。吸いさしの新生を大きな掌の中でもみくちやに押し潰すとポイと床に投げた。そして、たてつづけに水を飲んだ。

つづきは製品版でお読みください。